H本 G.A.P. ニュースレター

1 9 6 2

9・10

日本GAPニューズレター 1962−9月10月号

目　次

絶　滅 …… G・アダムスキ　1

論　理 …… C・A・ハニー　4

質疑応答 …… C・A・ハニー　7

《宇宙哲学》その3 …… G・アダムスキ　11

・感情のバランス …… 11

・自由意志か自己催眠か …… 13

・信　念 …… 14

・進化の道 …… 17

編集後記 …… 19

絶滅

ジョージ・アダムスキー

先般のニューズレターの記事で（注　ハニー氏のニューズレターで）ハニー氏は人間の絶滅について書きました。その記事は立派なものでしたが、読者のなかにはそれを読んで当惑した人もあったようです。我々が人間の創造された目的を達成しようとすれば、我々は甘いものとともに苦いものをもなめることを知る必要があります。人生は一面だけで成り立っているのではありません。

我々がちょっと立ちどまって大抵の人の生き方を仔細に観察するならば、一体人間は進化しようとしているのかどうかに疑問が生じてきます。殆どの生命界に寄生虫が存在するように、人間界にも寄生虫がいます。彼らは生きようという努力のもとに立派に振舞って知的に見えるかもしれませんが、自分自身の狭い世界に閉じ込められています。よく調べてみますと、彼らの努力はきわめて個人的なもので、自己の行為の九〇パーセントは個人的満足のためになされているのです。これは〝宇宙の目的〟からかけ離れています。

長年月のあいだいささかも変化することなく大多数の他人のために不幸と悲惨とを生み出してきた人々のやり方を人間は一体見たいのでしょうか。それとも戦闘的な人や、誤った噂をまき散らして自分たちが始めた物事を何一つ達成しない人々を見たいのでしょうか。

〝宇宙の計画〟に従った全自然は全創造物を平等に扱い、仕事を達成されないままに残したりはしません。このことからして我々は永続する生命の状態を学びとる必要があります。自然は永続的なものであるからです。それは絶えざる変化の状態にありますが、〝宇宙の計画〟からそれることはありません。自然はその目的に役立たないものを常に取り除くのです。

人間は一つの目的のために二本の腕を与えられましたが、もし一本の腕を自分の体に縛りつけてそれを全然使用しなければ、まもなく腕は衰えて自分にとって役立たなくなってしまいます。〝宇宙の目的〟に無用となった種は自然は排除しなかったでしょうか。しかし人間の場合は違います。

これについては二つの考え方があります。無神論者または不可知論者を自称する人は、あなたがこの世を生き終わった時完全に無になると言うでしょう。逆に、生命は永遠に続くのだと主張する人もあるでしょう。この両方とも正しいのです。それはもしかかる可能性がなかったならば我々はどちらか一方について考えることができないからです。すなわち思想（複数）は事物であるからです。生命を持つためには永続する〝もの〟がそれを得なければなりません。これが、イエスが次のように言った理由です。

「良い実を結ばない木は切られて火の中に投げ込まれる」また、彼は実のなっていないイチジクの木を呪いましたが、これは、万物はその創造者に奉仕して報いるべきであって、自己の姿の栄光

を自分自身に帰せるべきではないという意味ですけれども、多くの人間はこれをやっているのです。

はっきり申しますと、もし永続きしようとするのならば万物は自己が創造された目的に役立たねばなりません。イエスは次のように言っているではありませんか。「肉体を斬る者を恐れないで魂を斬る者を恐れよ」ヒンズー教徒の如き求道者たちは、もし人間が創造された目的のために役立たなければ、本人は人間としてでなく動物か爬虫類または植物となって生まれかわると教えています。これは火の中へ投げ込まれる木と同じことです。つまり、それは再び木にはならないのです。その一部はガスとなって放たれ、その一部は風の前に灰として残り、再び利用されるでしょうが、もとの木にはなりません。これは、"宇宙の計画"に自己を一致させない人にもあてはまります。本人の各元素は（肉体の原子は）他の面で役立ち続けるでしょうが、一つの自我としての本人は再び存在しないでしょう。

自我とは個性または俗念です。だからこそ聖書に俗念は滅びるために生まれると述べてあるのです。それは一、二種類の死を経るかもしれません。しかしそれは滅びなければならないのです。神の計画にたいする謙虚な召し使いになるためには一種の"死"が自我自体のために存在します。このようにして自我は永遠の生命を得るのです。一滴の水を例にあげますと、もしそれが自分で存在して自身の目的にのみ役立つだけならば、やがてそれは蒸発して再び同じ水滴にはならないでしょう。一方、この水滴が海洋と一体化するならば、個別的な水滴としての正体を失うことになるかもしれませんが（つまり個体としては死を経ることになるのですが）、しかしそれは永遠の生命を得ることになり、水滴としてのさまざまの体験を持つことになって、その体験を海洋の体験と一致させることになります。これは海洋が存続する限り続くでしょう。ところが、そうしなかったならばその水滴はきわめて短い生命とただ一滴の水としての体験だけを持つことになり、ついには蒸発して存在しなくなってしまいます。

ちょうど水滴がその魂である生命を持ったように（この魂はもと海洋の魂に属していた）、人間がどうして二つの魂から成っているかがここでおわかりになるでしょう。水滴が海洋へ帰ってゆくのは、放蕩息子が謙虚な気持ちになって再び家へ帰り、家族と一体化するのと似ています。水滴であったときの水は一つの独立した魂として行動していました。我々はそれを"個体"と呼んでいます。それは海洋の近くへ寄りつかず、孤立して、自身の利己的な欲望のままになっていました。それは他のすべてのものから分離した物としてその独立性を表わしていたわけです。その水滴は自分自身と自分の幸福のみに関心を持ちましたので、その結果多くの恐怖をつくり上げてしまいました。なぜなら、自分が服従していたところの、何か自分よりも大きなものを感ぜずにはいられなかったからです。それが原因となって、水滴は絶えず不安の状態におちいってしまったのです。未知の大海のなかへ入り込んで自我としての正体を失うか、それとも元のままの状態にとどまって蒸発して未来を失うかは、わからなかったわけです。

これが、「私の思いではなく、みこころのままになさって下さい」の意味です。もし自分の意志が元のままにあるならば、それは始めを持ったのと同じように終わりをも持つことになります。

海洋は目に見えるような始めも終わりも持たないのでそれと一体化した水滴はどれも海洋と同じ性質を持つことになり、今日も生き、更に永遠をも生きることになるのです。

人間もこれと同様です。自己の意志が〝宇宙の意志〟と一体にならなければ、本人は始めを持ったと同様に終りをも持つことになります。このことをよりよく理解するために、私の注意をひいた三つの実例を分析してみることにしましょう。

例一、或る婦人が十五年間も寝たきりになっています。そのあいだ彼女は地上の体験の記憶を次第に失ってきました。現在彼女は自分の妹をそれと見分けることができず、また苦痛をも感じていません。

彼女の肉体は完全な状態にあるのですが、ただ体が次第に柔らかくなってゆき、溶けてしまうような徴候を示しているのです。肉体の物質が元のガスとカーボンの状態に返ってゆくように思われるのです。これが続くならばついには骨だけになりますが、遺物は残ることになります。この人はたしかに記憶においては十五年間死につつあったのですが、始めは全く不快だったことでしょう。現在本人は肉体以外は全く死んだも同然です。

これは絶滅のよい例です。なぜなら記憶こそ死後も存続する自我に関する唯一のものであるからです。この人は自分がかつての自分で同じ実体であるということを再び知ることはないでしょう。現在その肉体をコントロールしている力（複数）は宇宙的、普遍的なもので、本人の心はなくても現在やっているように、肉体が完全に死んだときも引き続いて作用します。これは更に別な肉体を造り出す〝宇宙の魂〟なのですが、しかるに同じ自我はなくても肉体は現在生きて表われています。なぜこんなことが起こるのでしょう？

この人はかつてきわめて美しかった婦人で、随分お世辞や讃辞を呈された人でした。その結果彼女はその讃辞やお世辞を利用することによって元の自己というものを失ってしまい、完全に堕落して、自分の自我と個性という人工的な生命だけを生きるようになったのです。彼女の一部である宇宙の諸原理をかえりみる余裕はありませんでした。彼女がこの人間のお世辞を利用し始めたとき、事実上〝宇宙〟すなわち自己が生まれた目的と関係を絶ったのでした。そして彼女は〝宇宙〟と分離してこの世の生活だけをすごし始め、彼女の記憶はこの世だけのものから成り立ったのです。来世にまで持ち越されるのは記憶なのですから、彼女は宇宙と融合するものは何も持っていないわけです。

これは記憶喪失症や自分のことがわからなくなってしまう夢遊病などとは違います。自我または個性はもう過去を知らず、こんなふうにしてそれは生命のなかの自分の位置を失ってしまったのです。かりにその自我が別な人間となって自らを再生するとすれば、最初の肉体に役立ったのと同じ生命力が二度目の肉体にも役立つでしょう。しかし最初の記憶（肉体の魂）は完全に滅んでいます。二度目の肉体は最初の肉体の体験にいささかも気づくことはありません。これが絶滅の意味なのです。

例二、或る男がいてその人の興味は地上的なものが八〇パーセント、宇宙的なものが二〇パーセントありました。現在彼は自分の記憶の八〇パーセントを失いつつあります。数日間彼は何事も思い出すことができず、誰をも識別できないことがありますが、

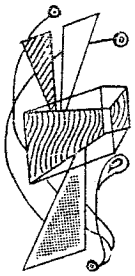
ときどき自分の正体によく気づくようになったり、周囲の人たちを認めたりする。この人は二度目のチャンスを持とうとしているのです。というわけは、自身の生涯においてこの人は自分を宇宙と融合させるための宇宙の法則に関する十分な思想を与えられたからです。ときとして自分の記憶に気づくのはこの生命力なのです。これが意味するところは、彼の記憶の或るものは来世に持ち越されて、それが宇宙内の一つの実体として存続するということです。この二度目のチャンスにおいてさえも、来世で生きるあいだに例の二〇パーセントに改善を加えなかったならば、本人はやはりこの実体を絶滅させることになるでしょう。

例三、私は或る男を個人的に知っていました。彼は人間なるものに非常な関心を持っていましたので、人間性ということについて起こった物事は何でも彼の心を痛めるのでした。彼は全創造物を宇宙の現われとみなしていたからです。幾日も彼は一人で座って空間を見つめていました。彼はたしかに宇宙と融合していましたので、その見地からして彼を聖者と呼んでいいでしょう。しかし一つだけ間違ったことがありました。彼はそのために地上の生活と関係を切って宇宙にのみ生きるようになり、地上の諸活動の記憶すべてを失ってしまったのです。やはり宇宙と地上の目的はともに融合されるべきものです。前者が原因で後者は結果であるからです。

完全というものが存在する唯一のときは、右の二つのあいだに完全な均衡が存在するときです。これは本人がバランスをとるために地上の生活に返らねばならぬことを意味します。宇宙には極端というものはないからです。彼は永遠の生命を持つでしょう。なぜなら、彼は自身の地上の本体なくして既にそれを持っているからです。キリストが「万物のなかの中庸」と言ったとき、それが地上であろうが天空であろうが、彼はバランスが法則であることを示しました。それで、我々の生活に宇宙を考慮に入れなければそれは誤っており、また地上の生活をも考慮に入れなければやはり誤っているのです。人間が本人の実体を持ったままで永遠の生命を持とうとするのならば、右の両方が一体化されなければなりません。　人間は活動するその法則を見ることができます。というのは、目に見えない宇宙空間は地球の一部であり、地球は宇宙空間の一部であるからです。その二つのあいだにバランスがあるためにそれらは一体となって現われているのです。一方が他方なしに存続することはできません。人間も同様です。

論理

C・A・ハニー



これまでに幾度も私は読者にたいして、より高い知識を求めるにあたって読破される記事や文章のすべてに論理をあてはめられるよう力説してきました。そうするためには出発にあたって根本的な基礎を必要とします。この記事があなたに意味をなすものならば、図書館へ行って以下にあげる各図書をお読みになることをおすすめします。それらを注意深く読んで、すぐれた生命観を得

ることができるかどうか、そして現在の世界の状勢に関してよりよき理解を持てるかどうかを考えてみて下さい。

論理とは何でしょうか。モーリス・R・コウヘン及びアーネスト・ネイゲル共著の〝論理と科学的方法〟と題する著書のなかに次のような定義があります。「論理とは正しい推論である。論理的であるとは合理的に論じることである。我々が或る一定の陳述を真実なるものと認める場合、論理によって我々は次に何が来るかを見出すことができる。論理とは異なる種類の証拠類の当否性に関係のあるものといってよいだろう。しかし伝統的にそれは何が証拠を構成するか、すなわち完全な決定的な証拠とは何かの調査に大体において応用されてきたものである」

実際には我々は或る陳述から何らかの結論を引き出すまでは論理を応用し始めてはいません。たとえ論理に基づいている陳述がウソであっても論理は正しいかもしれません。一例として、海は青い染料でできているということにします。すると海中を泳ぐものはみな青い皮膚を見せるということになります。これは始めの陳述に基づいた論理的な結論です。　しかしこの場合始めの陳述はウソです。別な例をあげましょう。ケアリフォーニア生まれの人は米国人です。そこで米国人のすべてはケアリフォーニア生まれだとしますと、始めの陳述は正しいのですけれども結論と論理は誤っています。また、あなたの信念は私の信念とは異なっているというので、結論として、だからあなたはあまり頭がよくないとします。始めの陳述は正しいのですが、あなたの信念が異なっているからといってあなたが私ほどに頭がよくないということにはなりません。しかしこれが実は今日の世の中に行われているきわめて貧弱な典型的な論法なのです。

長い年月を通じて人々は貧弱な論理を応用してきました。昔、一般人は地球が平たいと信じていました。その論理というのは次のようなものです。「それは平たく見えるじゃないか。平たくなかったら我々はどこかへ落ちる筈だ」ただそれだけのことです。今日、人々のなかには自分の信念を裏付けるのにこれと同じ貧弱な論理を応用する人があります。「私の牧師がこう言っている」「私の先生がそれは真実ではないと言っている」「最高権威者たちが同意している」「誰もが知っている」「数字が証明している」等々。　貧弱な推論と誤った論理の多くの例が、ごくわずかな事実から結論を一掃して、あまりに速断し予報などをしています。この種の非論理的な論証を打ち返すのはきわめて困難です。なぜならまだ起こっていない物事を立証したり論ばくしたりするのは極端にむつかしいからです。科学者はこの種の予報や非論理的な論法を〝外挿法〟と呼んでいます。多くの人がもし次のように言うならばこの種の誤ちをおかしていることになります。

「ソ連がXという国を手中に入れるならば、その結果全世界はソ連の支配下に入るだろう」または「もしあの連邦の法案が通過すれば、民間事業にたいする完全な抑圧が起こるだろう」米国のグループには速断または早合点でやってゆくのがいます。国の指導者がその団体のメンバーにもう少し論理的に考えよと警告すれば、彼らは「あなたがたはピンクだ。（注。赤色がかった思想家）」とやり返したりします。ときとしてかかる誤ちが極端に行なわれることがあるのです。スチュアート・チェイスはそのすぐれた著書〝条理整然とした考え方の指標〟（一九五六年、ニューヨ

ーク、ハーパー・アンド・ブラザーズ社刊）のなかで、誤った例として次のように言っています。

「多くの破壊者がハーヴァードへ行った。読者（ジョン・ドウ）はハーヴァードへ行った。それゆえ読者（ジョン・ドウ）は破壊者である。これと似たような推論法が実際にはあなたがかつて関係した社会や家族関係、あなたがかつて書いたあらゆる言葉、あなたがかつて読んだあらゆる書物にあてはまるのである。デイヴィッド・リリエンタールはその両親が一八八〇年代にチェッコスロヴァキアから来たというので共産主義者だといって上院で非難された。ソ連の衛星国になる五十年も前のことなのに——。現在ばかりでなく過去半世紀も昔の身寄りの者から罪が洩れ出ることもあるのだ」たしかにそのとおりです。他人を侮辱したり人身攻撃をしたりすることも非論理的な攻撃の一手段です。この誤りの好例はビショップ・ウィルバーフォースとハクスリーのあいだの有名な大論争に見出されます。ダーウィンとハクスリーによって唱えられた進化論は、ビショップ・アシャーの説いた人類の起源が西紀前四〇〇四年であるという説をあまりに近年すぎると指適しました。その起源はたった数千年前ではなくて数百万年前でなければならぬというわけです。

論争のあいだにビショップ・ウィルバーフォースは辛辣な皮肉をこめてハクスリーに質問しました。「あなたは母親側と父親側のいずれの系統のサルの子孫なのか？」これは一個人の家系、信念または精神状態について巧みな言葉を用いることによって問題の本筋をごまかすものです。この誤りの別な例がこのニューズレターの他の個所に見出されます。「病みついた心の持ち主だけが生まれかわり説を信じられるのだ」この例も他人を軽蔑することによって問題の本筋をそらそうとするものです。いうまでもなくこれはきわめて貧弱な論理であり、提示すべき論証を持たない人によって用いられるだけです。

或る人がアダムスキ氏の講演を聞きに行って、あとで彼は友人に言います。「すばらしい講演だった」すると友人は次のように語ります。「たいしたことはないよ。奴は教育を殆ど受けていないそうじゃないか」これは当事者を攻撃することによって真実の問題を投げ捨てる完全な例です。多数の人々がアダムスキ氏や私たちの仕事を打倒せんものと一貫してこの種の誤りをおかしています。論理のかわりに彼らは個人的にア氏をやっつけようとしているのです。

また或る人はいわゆる"原因と結果"説を誤って応用しています。このよい例は、毎朝雄ん鳥が鳴いた後に太陽が昇るのを見ている人です。そこで彼は雄ん鳥の鳴き声が太陽を昇らせているのだと推論します。最後にもう一つ例をあげましょう。まじめな円盤研究家は次のように言います。唯一の創造者によって或る円盤人たちに与えられた道徳律は、創造者が我々地球人に与えた道徳律とは異なるのではないかと。まじめな円盤研究家とは誰でしょうか。もちろんかかる人々がそうです。

質凝応答

C・A・ハニー

〔質問一〕　人間の死後の霊界には段階があるのですか。また霊界では何らかの体を持つ　ですか。（ジョージア州、アトランタ　E・A・B）

〔答〕　死後及び出生前に何が起こるかに関して我々はブラザーズの説明だけを認めている点をご諒承下さい。我々はそれを証明する方法を持っていませんけれども、私は彼らの説明を真実なものと思っています。それは論理的で筋が通っているからです。しかしそう思わない人もあるでしょう。ブラザーズのあいだで特に進化した人は自分の生まれかわりの場所を自分で選ぶことができるということで、イエスは地球への自発的な使節としてこれを行いました。それは自分の計画通りになるのであって、肉体的な出生を意味します。ブラザーズの説明によりますと、今日多数の人が説いているような〝霊界〟なるものは存在しないということです。さまざまの進化の段階にある各遊星をかかる場所と考えない限り、生存のための段階をもつ世界は存在しません。もちろんこれらの遊星は地球と同様に物質的なものです。

全自然は形あるものでも形のないものでも（たとえばガス状のもの）〝霊妙〟なのです。ブラザーズは、多くの自称神秘主義者がとなえているような〝霊体だけで生きている人間〟は存在しないと言っています。人間はすべて地球によく似た固体の遊星に住んでいるのです。

〔質問二〕　あらゆる遊星はそれ自体の霊界を持っているのですか。

〔答〕　右の答と同じことです。すべての遊星は地球と同様に同じ宇宙の法則のもとにあります。すべては同じ創造者から生み出されているので、同じ法則に従うのが当然です。

〔質問三〕　これまでの読書と探求で私は宇宙の法則という言葉を何度も見ましたが、まだ宇宙の法則一覧表というものを見たことがありません。それを示して下さいませんか。

〔答〕　アダムスキ氏著の〝テレパシー（精神感応）〟に、他の遊星の人々が応用している法則が述べてあります。それは一般に受け入れられている教えとは異なるのですが、我々が知識において向上するにつれて絶えず新しい教えが現われますので、ア氏の教えのすべてが人間によって知られることはないでしょう。言いかえれば、我々が如何に高く進化しても我々の前には常に新しい知識が存在しているのです。

宇宙の法則は地球の人間にとって新しいものでもなければ未知のものでもありません。それは大昔から哲学的な教えによって伝えられています。しかし一般人にとってかかる教えは神秘のマントで包まれてしまい、空想的なものだとされてしまったために、もみがらの山のなかに埋もれた〝真理〟の実を認める人は少数です。重要なのは、〝真実の哲学（宇宙の法則）〟は、万物が生み

出された目的に応じた生活の科学以外の何物でもないということです。私はブラザーズによって応用されている宇宙の法則・テレパシー・哲学などを含む通信講座を出すことを考えています。これを受けられればよく理解されることでしょう。特に哲学やテレパシーなどについて先入知識のない人は得るところ大なるものがあると思います。なぜならその人たちの心は、先人が〝具体的事実〟として疑うことなく認めてきた先入観にわざわいされていないからです。多くの人にとってはこの〝具体的事実〟が、先入観とは異なる何かの新しい概念への入口を閉ざす障壁になっているのです。毎月一人宛にレッスンを限定し、適当な基礎をもって始めることによって、多数のまじめな探求者は新しい考え方の同化に何ら支障なく、自己開発によき健全な基本的土台を得られることでしょう。ただ書物を乱読するよりもかかるステップ・バイ・ステップの方法によればもっと多くの知識が身につく筈です。加うるに各レッスンごとに試験を行えば受講者がどれほど進歩したかを調べることができます。こうしてできる多数の新しいリーダーは更に他の人へ宇宙の法則を伝えるほどに開発されることになるでしょう。こうしてこの運動は急速に地上で拡まるかもしれません。

宇宙の法則は聖書にあまねく述べられています。それはイエスによって伝えられました。その多くはたとえば次のように自明なものです。「他人からこうしてもらいたいと思うことを他人にもせよ」また他の法則は自然の法則を観察することによって見出されます。例をあげますと、太陽は正しい者にも不正な者にも等しく輝いている現象がそれです。太陽は人間の皮膚の色、性質の善悪、国籍別などを問題にしてはいません。この法則は「神は人間をえこひいきしない」と聖書に述べてあります。

〔質問四〕　あなたの独断的な教えによれば「正しく生きるならば死んでから天国へ行ける」という個所は聖書にはないということですが、次の個所についてはどのように説明しますか。(1)ルカによる福音書第十章二十五節から二十八節まで。(2)マタイによる福音書第七章二十一節。(3)ローマ人への手紙第二章六、七節（マサチューセッツ州、ローレンス、ガイ・J・シル神父）

〔答〕　これは三頁から成る質問表のなかの一つです。私は数週間にわたってそれらの各質問を検討しました。私の書く記事に関して私が自分の信念を述べるのに出しゃばり過ぎているといった意味の感想をシル師は書いておられます。たとえば、生まれかわり説について述べた私の或る記事について師は次のように言っています。「あなたがこの説を単なる〝肉体的〟な生まれかわりとみるならば、あなたはとっくの昔にくつがえされてもはや少数の病みついた心の持ち主以外に相手にされない生まれかわり説を読者のノドに独断的に詰め込むために、その説の元の意味をひどくゆがめているのだ」

私は自分の記事にたいして誰が異議を申し立てようと反対論をとなえようとも何ら気にするものではありません。私はただその人々が紳士的に振舞うべき礼儀をわきまえられることを、少なくともこの問題において聖職者らしくされることを望むものです。私は読者の方々が病的な心の持ち主として非難を受けるような人ではないと確信します。病人ということになればとにかくこの問題を捨ててしまうことになります。

他人を非難するような手紙を私が受けとる場合、私はそれに回答を送る必要はないものとみなして通常無視することにしています。しかしこの質問の場合はシル師が聖書を学んでおられることその内容を熟知しておられること、他の聖書研究家に共通したポイントを提示されたことなどにかんがみて、例外を設けることにしました。私は人間がこの世で如何に正しく生きても死んだあとで天国へ行けるということを聖書は約束していないと述べました。これは教会が説いている意味と比較した上でのことです。シル師は例をあげていますが、師の聖書からの引用である前記ルカ伝とローマ人への手紙中の個所は全然そんなことに関係なく、また死後の報いとして天国へ行けるといった暗示のかけらをも示してはいません。それらはただ永遠の生命とそれを得るための必要条件とを約束しているだけです。永遠の生命というのは私がニューズレターの哲学シリーズで述べてきたのと全く同じものです。聖書中の右の各引用節には天国という言葉さえ含まれてはいません。質問の意味とはまるで筋違いのものです。

マタイによる福音書第七章二十一節はどうでしょうか。これは人間が死んでから天国へ入るといっているのではありません。これは天「のなかに」いる父の意志を行なうならばその者は天「の」国に入るといっているのです。天「の」国へ入れるというのであって、天「のなかの」国でないことに注意して下さい。我々は誰も of(の) という言葉と in(のなかの) という言葉の相違を知っている筈です。天「の」国とあっても必ずしも天空のなかに存在しているというのではありません。私は言葉のあやで言い逃がれを言っているのではありません。聖書は〝天の国〟と〝天のなかの国〟とは二つの異なる場所の異なる国であることをきわめて明らかにしています。それはあたかも米国から飛び出た飛行機がフランスに着陸するのと同じようなものです。その場合我々は米国「の」飛行機がいると言いますが、米国「のなかに」飛行機がいるとは言いません。

正しき者が死んだあとで天国へ行けるものとするならば、ダビデ、アブラハム、エリヤ、モーセ、その他旧約に出て来る予言者たちがなぜ天国へ行かなかったのでしょう。ヨハネによる福音書第三章十三節でイエスは「天から下って来た者、すなわち人の子のほかには誰も天に上った者はない」と言っています。教会の説教によりますと、イエスは天国と呼ばれる或る場所から来たのだといわれています。そうだとすれば、イエスは前記の予言者たちが死んでから天国へ行っている状態を当然知っている筈であるにもかかわらず、「誰も天に上った者はいない」と言うのです。イエスはウソつきだったのでしょうか。

これは実際にはイエスが金星から来て、使命を遂行するためにこの地上で生まれかわり、それが終ってから再び金星へ帰って行った事実を意味するのです。我々もこの地上の生命を卒業できるほどに進化するならば、より高度な遊星、金星にさえも生まれかわることはできるのであって、その意味でなら、死後天国へ行けるということを認めてよいでしょう。聖書中の多くの文章は、いわゆる黄金時代と呼ばれる一千年間にこの地上にも天国が築かれることを確証しています。ルカによる福音書第一章三十二節及び三十三節を参照して下さい。ヨハネの黙示録第十一章十五節にはこの世の国はキリストの支配下になるべき（言いかえれば宇宙の

法則に従うべき）国の一部になるとあります。第二のキリストの到来こそは、あらゆる国家が武力を捨てて平和に暮らすことによってこの地上にも天国を確立することでした。

以上の説明のすべてを私はこれから先に起こるブラザーズ問題に必ずしもあてはめようというのではなく、聖書に関する限りそれは人間死後の問題についてブラザーズの教えに一致するのであって、人間の教義や教えを裏書きしてはいないということを示すために引用したまでです。

もう少し聖書を調べてみたい方は、次の各個所を読まれるとよいでしょう。創世記第十五章八節、第十二章六十七節、第二十六章一節から三節。ヨハネの黙示録第二章二十六、七節。第五章十節、第二十章六節。イザヤ書第十一章、第八章九、十節、第九章六、七節。ダニエル書第二章四十四節、第七章十八節。ルカによる福音書第二十二章二十八節から三十節、第十九章十七節。

〔質問五〕　ブラザーズはこの世界にたいして彼らの存在を気づかれたくないというあなたの声明に驚きました。これをもう少し説明して下さい。（オーストリア・D・B）

〔答〕　私が一体何を言わんとしているかについては、私の書く記事をとにかく全部読んで下さい。私がこれまで幾度も述べてきたのは、ブラザーズが世界中に知られるために公然と現われるにはまだ機が熟していないということです。これは真実なのでしてもし彼らが自らを一般人に知ってもらいたいのなら、それは一夜にしてできるのです。それではなぜ彼らは広く一般人に納得させようとしないのでしょうか。それはつまり、かかる重要な知識を伝えるのにこの世界は全く準備ができていないために、現在の段階ではその知識を受け入れることはできないからです。

ブラザーズは各国政府の首脳者たちとコンタクトしてきておりなかにはこの世界に住んで彼らの計画の一部をなす人たちと連絡しているのもあります。一般人にはこの知識を与えられる準備はできていませんが、或る人々はその準備ができていますので、我々はその人々と連絡を試みようとしています。我々は万人を納得させようとか、懐疑論者に自覚させようなどとしているのではありません。ただまじめな興味を持ってかかる知識を得たいと思われる方にのみその知識をお伝えすることが必要だと感じているのです。

〔質問六〕　米国またはソ連が月に到着した際に、月をすでに基地としている遊星人から援助を受けるでしょうか。（ベトナム、I・S・J）

〔答〕　誰が最初に月へ到着しようとも必要ならば援助を受けるでしょう。多数の人が気づいていないのは、誰がそこへ最初に到着しようとも、出発する前からこの目的にたいして援助を受けることになるだろうという点です。目下この月旅行計画で最も重要なことは、誰がそこへ到着しても、発見した事を公然と報告し返すか否かということです。

月に関するアダムスキ氏の記事が真実であったことを人々が知ったとき、ア氏のその他の記事をも信じないでいるほうが困難なこともわかるでしょう。この問題について未だ隠されている諸事実が明るみに出されるほどにこの世界の知識のレヴェルが向上することが先決問題です。

宇宙哲学　その3

感情のバランス

G・アダムスキー

誰もが知っているように世界中には大きな不安が存在している。国家、家庭、個人の生活などに存在するさまざまの状態はすべて現在存在する均衡を失った有様を全く明らかに示している。平等バランス及び確信の気持をもちたいといった望みは或る人々をして教会へ復帰せしめ、新しい教理に関する解答のすべてを知っていると称する導師たちに多くの人々をしたがわせている。しかし不幸にしてこの種の知識をそなえている人は殆んどいないのである。われわれは、一人か二人の教師のもとに学んだ学生たちはきわめて迷っていて、彼らが家庭と呼ばねばならぬ世界に関して不満足の状態に生きていることを知っている。彼らは別な遊星の住人になる特権が与えられる時日に向っている。彼らはこの世界で美を見ることはできず、存在する苦痛と不幸だけとを意識しているのである。

教師と学生たちは天と地とを分離させるという誤ちをおかしており、それゆえ一つの間違ったバランスから別な間違ったバランスへと次々に運ばれてきている。しかし、非個人的な人は天と地とを一体化させ、観念論と実際主義とを結合し、天空の平安と美とを地上の物質主義にもたらすものである。現在のこの世界で楽しい有益な生活を送ることのできない人は別な遊星へ行ってもそれがもっと困難なことがわかるだろう。その息によってわれわれが生きている。〝父〟とは、万物を支配している一つの〝法則〟だけをもっている。〝父〟は万物を創造したようにこの地球をも創造した。そして同じ原理がその活動を支配しているのである。宇宙のすべての遊星は原理に関して等しく、それで〝法則〟にしたがって生きる人にとって完全なるものの分裂はない。

マタイによる福音書第五章三十四節及び三十五節には分裂にたいして率直に述べられた訓戒がある。「しかし、わたしはあなたがたに言う。いっさい誓ってはならない。天をさして誓うな。そこは神の御座であるから。また地をさして誓うな。そこは神の足台であるから。またエルサレムをさして誓うな。それは『大王の都』であるから」

原因の場である天、結果の場である地、及び地球の住民を表現するために象徴的に用いられた言葉―エルサレムなど、これらは一つだけが他よりも偉大だとはいえないのである。この教えは差別したりまたは一部を全体よりもすぐれていると称したりすることにたいして与えられたものである。天と地とは二つのものではなくて一体なのであり、そのおのおのが他方を表現しているのである。人間は小なるものではない。人間はこの両者であり、〝全体〟のなかの欠くべからざる一部であるからだ。分裂というものは人間が甲を乙よりも偉大だととなえる場合にその意見としてのみ存在する。というのは、そうすることにおいて人間は他を審いて自分を〝創造者〟の上位に置いているのである。

天から原因と創造の力が来る。そして〝父〟の御座である地は、〝父〟が立つための土台である。それで、人間はどこかの他の場所で生きることを望むかわりに、そこにあるすべてのことは現在の地球という家庭に関して知るためのものであることを悟り、そしてその家庭を美しい、神聖なもののある庭、〝父〟の実際の庭として認めねばならない。

生まれつきあらゆる人間は自分が見出そうと努力しているところの或る理想的な生活を意識している。しかし各人はこの天空が自分の設計書通りにあって欲しいのである。多くのグループが高い理想をかかげて出発しているが、しかしそのメンバーたちの誰かの自我によってうながされた個人的な意見が認められてきていない場合は、その理想は感情の相違という霧のなかに失われるのである。

人間を形あるものとして表現せしめるところの絶えざる生命の火花は、〝宇宙の因〟から決して分離していない。人間が外形的な結果を超えて考えるためにその肉体の感官の心を抑制するとき人間は生命の目的を理解し始め、感情のバランスという利益を得るのである。

個人の意志が他人の意志によって邪魔されるときに心に起こる感情の力はきわめて破壊的である。というのはその力が行為者をアンバランスな行為という渦巻きのなかへ引っ張り込み、彼は真実にたいして盲目となるからである。

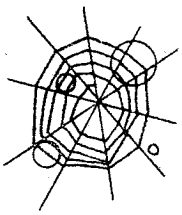
人間が現実に存在するすべては――彼が束の間に意識的に知覚する想念である。各瞬間はその前の瞬間に続くのであり、そしてキイは我々の反応にたいして寝ずの番をすることである。そうすれば次の想念は我々の心の家屋のなかで楽しむことのできるような想念になるだろう。

個人的な意見の上ではあまり口論が多すぎるのであるが、それが人間にどれほどの利益をもたらすだろう。何にもなりはしない。それは時間と労力の消費者であるからだ。このことは問題について知的な討論があってはならないというのではなく、肉体のセンス・マインドが静まってその感受性が鋭敏になるとき、それは状態を明瞭に見ることができるという意味である。

もし人間がいつまでも楽しく健康でありたいならば、あらゆる状態のもとで保たれる感情のバランスが基本的なものである。

感情が極端になればそれはいずれも肉体の化学物質の正常な振動運動を妨害する。興奮というものはそれが極端な喜び、恐怖、期待のいずれによってひき起こされるにせよ、血液中に入る或る物質の正常な量を変化させ、それによって心臓の正常な働きを変化させるのである。これは更に神経系統や肉体細胞にも影響を及ぼし、本人に衰弱または病気を感じさせることになるのだ。

この変化は、正しく同時運動が行なわれない場合に、その部品のすべてに摩擦によって摩滅状態を起こす高精密モーターに似ている。肉体の感官の英知がその狭い破壊的な影響に気づくようになり、その個人的な自我を〝宇宙の生命力〟へ解放するまでは、感情のアンバランスのいずれも自由な生命が溢れ出るのをせきとめて、肉体に損傷を起こすのである。



自由意志か 自己催眠か

この二つを選ぶ選択権はあなたにある。今日の活動は明日の報いをもたらすからだ。楽しむべき報酬は〝因の知性〟によって働かされている諸法則にしたがって生きている人たちに来るのである。――〝すべてを創造する生命の原理〟に敬意を表する人にだけ。そしてかかる敬意は感激性や自己催眠を含むものではない。

宗教やいわゆる精神上の指導者たちは、大抵の場合、人類に真実の悟りをもたらしてはいない。これらの宗教団体のなかには儀式のあいだに一時的な陶酔を起こす礼拝や誓いなどを行なっているのもあるが、その行事が終ったあとは甚だしい〝たるみ〟を感じさせる傾向がある。出席者の殆どは世俗的な仕事にかえってから、適者生存の態度が待ちかまえているところの旧習にたちかえり、かくて人間は兄弟の保護者であるかわりにその兄弟を利用し続けるのである。教会のなかでは自分の欲求にしたがって他人を助けたいと思い、憎悪があったところに愛と解釈される感情が湧き起こってくるけれども、教会の外へ出ればこのような気持は変ってしまい、それが出席した際の行事によって起こされる一種の催眠効果にほかならないことがわかるのである。

催眠術師が被術者を意のままにしようとするときは、或る物を暗示してそれを相手の心にしっかりと保つように頼むのだといっても間違いではないだろう。もし被術者がそうするならば彼は催眠術師の意志の犠牲になり、如何なる想念が与えられようともそれに従わさせられるのである。術者は被術者に語ることを何でも信じさせることができる。被術者にこれはリンゴだと暗示してタマネギを食べさせることもできるが、被術者はその相違を見分けることはできない。そしてそのことは被術者が意志力ばかりでなく推理力をも失っていることを示している。

むかし宗教は右のようなやり方で大衆を支配した。魂を求める俗人たちは感動的な催眠状態になり、このためにかかる礼拝の方法を行なったもっと利口な人にとってたやすく餌食になったのである。

あなたはキャンプ・ミーティング（訳注。野外集会。主にメソジスト派の人々の行なう数日にわたる宗教的集会。米国で始められた）に出席したことがあるだろうか。この集会では参加者たちは非常に熱狂的な感動の状態におちいるので、ついには夢遊病者の如く平常の意識あるときには絶対にできないようなことをするのである。この熱狂状態から覚めて、自分が何をしたか知っているかと尋ねられると、彼らは知らないと答える。彼らが感じていることはただ〝聖霊〟に支配されたということなのだ。このことは彼らが或る力のもとにひき込まれ、それが彼らから推理と意志の力を奪ったことを示している。

自己喝采している或る新興宗教団体類はさまざまの方法によって起こされるこの感動催眠を用いている。無数の人々が病気の治癒を証明しつつあるけれども、しかし永久的な治癒または肉体の若返りは扱われる諸条件の理解を通じて得られねばならない。そしてあらゆる行為は意志の自由な意識的な状態で実行されねばならない。ほんとうの信仰は自己催眠の状態ではなく知ることであ

り、個人的な自我の意志を〝完全なる英知をもつ因の意志〟の導きにまかせることである。この〝因の意志〟とは人間であって、もしこの〝因の意志〟が制限されたり他によって支配されるならば、人は思考し推理する人間として存在することをやめるのである。人間は自己の存在の力（複数）を理解して、自分の生活に望ましい結果をもたらすためにこれらの力をコントロールしなければならない。

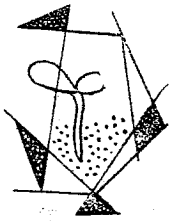
望ましい活動に似た多くの結果が自己催眠によって生み出されることがあるというのは事実だが、本人が正常な心の状態に返ったとき、彼は体験を得た過程に気づいていない。それゆえ、それは彼のためにはならない。なぜなら彼はその特殊な体験に再び出くわすことは決してできないからだ。そして彼は自分の意志を弱めてしまったのである。〝因の力〟は人間の存在の支配要素である——個別化された意識を人間または獣、神または悪魔にする要素だ。

如何なる努力において成功するにもそれは自己催眠によるのではなくて自制によるのである。常道から踏みはずれた意志はあらゆる肉体の苦痛の原因であるが、その苦痛は催眠術などによるたんなる意志の抑圧によってはいつまでも減少されはしないのだ。意志と理解力は奉仕と達成の価値ある生活を生み出すために結合されねばならない。感動というものはきわめて容易に幻想的な結果を生み出し、個人を一時的な恍惚状態に高揚させるのであるがそれは肉体の若返り、または生命と宇宙の全包容的な理解に必要な因の意志に自我の意志を変化させることなどをもたらし得ないのである。羊小屋に入る道は一つしかない。それは理解の分野において意識的な知覚力を拡げることと、意志を弱めるかわりに意志の系統的な訓練とによるのである。

キリストは言った。「肉体を斬る人を恐れないで、魂を斬る人を恐れよ」この個別化された魂とは人間の推理力と意志の力である。

新しさ、絶えまなき活動、想念の発達、考えの置きかえなどは人間を生命との歩調のなかに保つのである。もしあなたが宇宙について広い理解を求めようとするならば、あなたは肯定したり否定したりする必要はなく、ただあなた自身と他人の改良のためという十分の理由があってあなたの感情の力を用いればよい。感情の奴隷となるかわりに自身の感情をコントロールすることだ。一時的な自己催眠であるコントロールされない感情は罪の原因であるからだ。あなたは同胞を殺すようなことは決してしないだろうが、もし自己催眠にふけるならば自分の魂を殺すという罪をおかすことになるのである。

信念



信念とはおそらくこの世で最も広く論じられた話題の一つであろう。しかしそれは殆ど理解されていない。教師、聖職者、心理学者などすべてが信念を発達させることをすすめており、これが生活の基本的な能力であると主張しているけれども、この特殊な能力を説明するのに困難を感じているのである。

われわれは現象の世界における万物が陽と陰との性質をもっていることを知っている。信念は人間の性質の陽の面の一つである。それならば信念の反対になるものは何だろう。いうまでもなく恐怖だ！　それゆえ、一方を理解するためには他方をも理解する必要がある。この二つは一本の竿の両端なのである。恐怖は低次な表現であるので、先ずその分析から始めて次第に信念に及ぶことにしよう。

われわれが恐怖を分析するならば、それが自己維持と安全に関する不安の状態によって生み出されることがわかる。殆どあらゆる場合に恐怖は人間の個人的な存在または私利に焦点が合わされている。大抵の人は生活上の諸活動を自分や自分に親しい人に影響を及ぼすものとみなしている。彼らは結果の世界の意識のなかに生きていて、自己維持のために外界の物事に頼っているのである。そして外界の結果の不安定さについての認識は自分の心のなかに不安の状態を生み出すのである。そこでわれわれは、恐怖は自己中心の状態で、信念は人間の非個人的な状態を実行しているということができる。恐怖は結果に基づいており、信念は、〝原理〟または〝因〟に基づいているのである。

キリストの次の言葉は何度くり返されたことだろう。「もしカラシ種一粒ほどの信念があるなら、この山にむかって『ここからあそこに移れ』といえば移るであろう。このように、あなたがたにできない事は何もないであろう」この言葉は如何に小さな信念といえども現象を生み出すのに必要であるかを示すために用いられてきた。しかしこの言葉は「一粒のカラシ種と同じ大きさの信念」ではなくて「一粒のカラシ種ほどの信念」であることに注意すべきである。信念の量ではなくて質が右の言葉のなかに引用されていると考えられるのである。カラシ種の意識を調べてみよう。その個体的な存在に関して恐怖に負かされるだろうか。何がそれを生長させるのだろう。それをうながして活動させるのは、その内部の意識的な衝動力ではないだろうか。その種子を大きくさせ殻を破って光の方へ向かわせるところの種子自体の内部にあるこの衝動だけをその種子は知っている。その種子はこの自然の生長の力に抵抗しようとはしないし、こんなふうに活動するのが正しいかどうかと考えたりもしない。それは疑いもなくその目的の法則または原理にしたがって活動しているのである。それはもろもろの結果をあてにはしないし、人間、土、水、太陽などをあてにしてはいないのだ。それは生長して薮となって広がる。その内部の力がそんなふうに生長するようにと命じるからである。

ここであなたはきっと次のように言うだろう。「しかしその種子は土、空気、水、太陽などの援助なくして生長することはできないだろう」と。これは事実だが、しかし種子は〝宇宙〟または〝因〟の英知の命令にしたがっているので、必要な要素のすべてが種子を生み出すために一体となっているのである。カラシ種の種子は寒い冬のあいだに地面から首を出すように命じられてはいないし、内部からのあの衝動なくして生長したがったりはしない。それはただ生長すべき時機が来たと感じるまで忍耐強く待つのである。人間が自分の心に印象づけられようとしている生命についてのより広い概念に関する新しい考え方に疑いをさしはさむのと同様に、もし種子が生長しようという衝動に疑いをさしはさんだとすれば一体どうなるだろう。その衝動に抵抗しないことによっ

て種子が美しいヤブに生長するように、人間も同様にして、もし非個人的な考えまたは望みが起こるならばそれは一つの目的を求めて存在するということ、そしてもし意志に基づいて行動するならば有益な結果を生み出すことなどを人間は確信するにちがいない。欲望というものは行為に抵抗しながら個人的な意志の努力によってのみ実現させないようにすることができるのである。というのは、想念または欲望は外界の状態を生み出す実際の〝原因〟であるからだ。

人間における信念の発達は個人から非個人的な知覚力の拡張へ生長することである。すなわち、結果から万象の背後にある原因へ生長することなのである。

完全な不信というものは存在しない。小さな信念から大きな信念への発達があるだけだ。導師ゾロアスターが説明したように、「悪とは熟さない善にすぎない」のである。同様に、恐怖は未発達な信念にすぎない。人間は〝因なる英知〟から結果の世界へ来た。人間の肉体の感官の心は〝宇宙の因〟の記憶を失った。それで今や自分自身を再建する過程にある。人間は〝原理〟との一本化へ返る途中にあるが、そこでは無数の結果のすべてをともなった利己主義が消え去るのである。信念が確立されるのは〝因〟の認識によるのである。

太陽が毎日昇ることをなぜわれわれは心から確認しているのだろう。毎朝、夜明けになる数時間前に起き上がり、永遠の暗黒が続くことを予想して激しい不安に両手を握りしめている人のことをあなたは聞いたことがあるだろうか。ないだろう。われわれはそんな恐怖をもちはしない。そしてこの場合にわれわれが疑わない主な理由は、太陽や遊星の活動はわれわれの肉体の心が考え得るよりもより大きくて、それゆえにわれわれはかかる活動を、すべての活動を理解し永続せしめている〝すべてを知る原理〟の御手に全くまかせきっているからである。この場合、われわれは自分の個人的な無力さを悟り、それについて人間的な努力を払って自分を関係させたりすることはしない。ただそのような活動の起こるにまかせるだけだ。

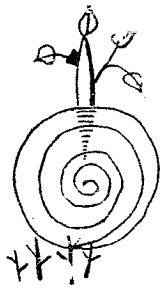
われわれは河の水が丘の上にむかって高く流れ始めるかと心配するだろうか。重い物を落としてそれが再び持ち上がればいいがと気にかけるだろうか。またボールを空中に投げ上げてそれが地上へ帰って来るだろうかと疑うだろうか。そんなことはない。なぜなら再度いうとわれわれはこのような活動を支配する原理を知っているからである。

われわれが恐怖心を除き得るのは物質にたいする自信にかかっているのではなく、物質を支えて制御している原理にたいする生得の信によるのである。私が〝生得の〟というわけは、信を生み出す〝宇宙の因〟は各人の内奥にあるからだ。それは手足よりもっと親密なもので、肉体人間としてのわれわれがその存在を公然と認めようが認めまいが、われわれはそれに気づいているのである。さもないとわれわれは意識ある生ける存在とはならないだろう。

そこで〝原理（元になる源泉）〟の結果にわれわれの注意力のすべてを集中させるかわりに〝原理〟そのものを探求することがわれわれの義務なのである。われわれがこの内奥の導きの力の方へ注意力を向けるならば、われわれは十分に目覚めるようになり

あらゆる生命の相互関係を感じるのである。人間が活動の或る直接の結果を見ていないかぎり、この内奥の力にたいして個人的な自我を解放した時は決してなかったのである。それゆえ、人間が〝全英知〟との一体性に十分に気がつくようになればなるほど、人間の信は増大してその結果恐怖は減少するのである。信は人間と〝全体〟との一体化の結果であって、結果的に起こるあらゆる種類の恐怖をともなう利己主義の想念のすべてが、障壁から自由な理解という道からそれて離れてしまうまでは、右のような一体化は起こり得ないのである。それゆえ、われわれは完全な信は容易に達成できるものではないことがわかる。――それはちょうど万物が漸次変化してゆくように徐々の生長を通じて来るのだ。信とは実はより以上の知識と活動の確実性を包括するために意識的な知覚力を拡げることなのである。

進化の道



東洋の賢人たちは人間の生き方についての道標として用いるのにわるくないと思われる多くの知恵の言葉を後世に残している。中国の諺のなかに「千里の旅は一歩から始まる」という意味の言葉がある。

この頃のように間断なき活動と無数の新発見の行なわれる時代に、また宇宙人とコンタクトしたとか指導を受けているとか称する無数の団体の主張のさなかに、そしてさまざまのうつろいやすい環境のなかにあって、活動（または行為）はただ一歩で始まるという考えのもとに右の知恵の言葉をよく味わって自分自身を安定させるのもいいことだろう。目標が如何に遠かろうが近かろうが、一時に一歩しか歩めないのだ。その方向に人間を運ぶのは前方か後方への第一歩なのである。このことは我々の日常生活のあらゆる活動にもあてはまることで、統一された生命を生きるための出発においても全く真実だといえることである。きまりきった古い習慣から自分を脱出させて新しい習慣の道に沿って出発するには、一時にただ一歩だけを必要とするのであるが、しかしその歩みは完全なものでなければならない。我々は片足を前方に出したまま片足を古い習慣のなかにとどめておくわけにはゆかない。こんなことでは進歩したことにならないからだ。しかしこれは多数の人が清新な宇宙的な生命のなかに前進しようとしながらもやっていることである。――〝因〟の広大さのなかに前進しようとしながら、一方では伝統的な信念や意見などの狭い概念に固執しているのだ。

進化の道を歩むには勇気と信念を必要とするのである。疑い深い人はいつまでも同じ古い習慣のなかにとどまるだろう。本人はより大きな知識の方へ自分の視力を向けるかもしれないが、自分の立っている地点から自分を解放して一歩を踏み出さないかぎりいつまでも神秘の夢を見続けるだろう。

かつて故国から船出した先駆者たちが信念と勇気を失い、船を旧世界の港に停泊させたまま、ただ新大陸の夢ばかりを見ながら日を送っていたとすれば、この国（訳注。米国）は今日どんなになっていたことだろう。

もし少数の人が既知のものと未知のものとのあいだの割れ目に橋をかけようという信念をもたず、その橋に第一歩を印しようという勇気をもたなかったとしたら、人類が恩恵に浴している無数の科学的発見は未だに〝因〟の領域にあることだろう。我々が今日楽しんでいる多くの物事は、新しい知覚の領域に突入するほどの勇気をもっていた少数者にその功を帰せられてよい。

生命の全体のなかへ足を踏み入れることが我々を未踏の世界に運ぶということは真実であるが、もし我々がいつも目に見えるもののみの世界にとどまったとすれば、我々の存在はどんなになったことだろう。如何なる問題をも探求することはわれわれを沈滞から知識と進歩へ導くのである。誰もが新しい物事のなかへ足を踏み入れて永続的な進歩の学校で研究する特権が与えられているのであれば、崩壊の状態、または静止した精神状態のままにある必要はない。人間が束縛されるべき場所というものは存在しない。その場所が活動の世界にあっても事実の世界にあっても人間は自由に前進できるのである。静止というものはない。人は上か下のいずれかへ行かねばならない。そして上方への歩みこそとるべき正しい行為である。さまざまの文書が秘蔵してある地上の知識の貯蔵庫のすべては、宇宙の貯蔵庫内に保存されている知恵の発端をさえも含んではいない。

一歩踏み出せば人間は永遠の学習の道に足を印することができる――制限や束縛を知らない〝因〟の研究所内にのみ存在するもろもろの事実の絶え間なき啓示の道にだ。

しかしあなたが第一歩を踏み出した後は、あなたの理解力が許す限度以上に急速に旅をしないよう忍耐のレッスンを学ぶことである。一歩であなたはその路上にあるだろうが、前方には無数の歩みがある。あなたが或る目標に到着してもなお〝永遠〟を通じて旅しなければならないのだ。人間は知らなければならぬ物事のすべてを知ることは決してできない。もしそれができたとすれば万物に終わりがあることになるからだ。このことが真実であることがわかっているのに、どうして先頭を切りたがるのだろう。われわれが踏み出す歩みはいずれも新しい。そして各歩みはその前に到着した地点からみれば最初の歩みになるのである。理想をもつのはよいことだ。活動を続けようという刺激を得ることができるようにわれわれは前方にある生命の完全さをときどき覗き見することが許されるが、われわれが全く未来にのみ目を向けているならば現在の美を必ず見失うのであり、いばらの畑のなかへ転げ込んで、逃がれ出ようともがきながら大きな苦しみを味わうことになるかもしれない。

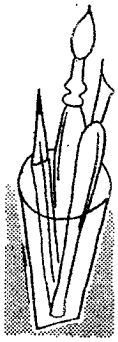
大切なのは、若さは絶えず新しくされる想念の結果であるということ、及び生命は活動であるということである。

――それが進化なのだ。如何なる達成の分野に第一歩を踏み出してもそれは新しい努力の開始であり、知覚から生まれた確実さを必要とする。――われわれの現在の視界を超えて存在する広漠さについての確信を必要とするのである。新しい歩みのいずれもが何をもたらすかはあなたにも私にもわからないが、その旅は行なわれねばならない。そして信念のみが我々に真実を洩らすのである。

地上の生活を通じてわれわれは多くを学んできた。しかし〝因〟の領域へ思いきって進むにつれてこれからまだどんなに多くを学

ぶことになるだろう。われわれが結果の世界でこれまでに知ってきた以上にもっと大きな美を知るだろう。かかる知識への到達は困難ではない　ただ一歩の踏み出しそのものが、これまでわれわれにとって未知であった室の錠をはずす鍵であることを証し得るのである。「啓示されないものはない」とわれわれは聞いている。心の勇敢な人の視界にとっては、真理は秘され得ないのだ。ただ一つの犠牲、すなわち古い習慣的想念の解放が、あなたがこれまで可能だと夢見てきたよりもはるかに大きな報酬をもたらすだろう。

編集後記



◎　かねて本誌で概略を紹介しましたアダムスキ氏のFlying Saucers Farewell（円盤との訣別）は〝空飛ぶ円盤の真相〟と題して、私の拙訳になる邦訳版がこのたび高文社から刊行されました。この書の出版にあたって絶大なご支援を寄せられました〝日本GAP〟のメンバー各位に厚くお礼を申し上げる次第です。現在国内では円盤関係の図書を刊行することがきわめて困難な状態にあるにもかかわらず、この種の訳書が（しかもアダムスキ氏の著書が）中央から出版されましたことは、私にはただの偶然だとは思えません。出版に至るいきさつなどを考えますと、何か見えない力が働きかけていたような気がします。私の感謝の念は或る広い範囲にまでひろげられねばならないようです。

ご承知のようにこの書はさきに出された〝空飛ぶ円盤同乗記〟の続篇でありますから、〝同乗記〟中の記事で判然としなかった個所の大部分はこの書をお読みになることによって氷解することと存じます。地方の書店で入手できない方は直接高文社へご注文下さい。「東京都文京区森川町七〇、有信堂・高文社（振替東京一四一七五〇）定価三五〇円、送料五〇円」

◎　私がアダムスキ氏を支持致します理由の一つは、氏の哲学はこれまでの如何なる哲学とも異なって、テレパシー（精神感応）という現象が存在する事実を伝え、人間の生きる道について全く新しい方向を示した点にあります。かつての哲学者の殆どは人間のもつこの潜在能力を夢想もしなかったことでしょう。これまでの哲学や精神科学、宗教などはテレパシーの可能性までは説いておらず、結局あらゆる主義・思想はしょせん人間の頭脳からひねり出された理論の空転にすぎないのだといった印象を一般人に与えていることは否定できません。主観的観念論も唯物弁証法もひとつの思惟方法であるにせよ、個人の理解力、魂の目覚めといったものをさほど促進するものとは思われませんし、また何かの教義をウ呑みに信じ込むことも共鳴による思考力停止作用にほかならず、せんじつめれば真実の魂のカテといったものはどこにも見当らず、自己解釈による実存主義が栄えるわけですが、しかしこれは人間の内部に存在する或る未知の能力に誰もが気づいていないからではないでしょうか。もちろん過去の宗教や哲学のすべては社会に何らかの影響を与えていますからそれを無視するわけにはゆきませんが、私にはどうも主義のための哲学、主義のための宗教といった感じがします。それらのあいだに理論上の闘争の絶

えまがないからです。イエスがテレパシーの能力をもっていたらしいことに私は非常な魅力を感じますが、キリスト教という大宗教を作り上げたのは後世の人間で、現在あるものは宗派の勢力争いだけです。

アダムスキ氏の説く哲学やテレパシーはかかる主義・思想を個人の頭脳から生み出すことではなく、人間相互の精神波動の交流が可能になるほどに万物と一体化することを意味します。いいかえれば個人の感受性を開発することなのですが、そのためには先ず"自然"にたいする観察が重要だというア氏の言葉は私にはウソだとは思えません。或る種の動物が明らかにテレパシーの能力をもっているのに人間はそれよりも或る意味では劣るといえるからです。論理的に考えても動物以上に驚異的な複雑な構造をもつ人間がこの能力をもたぬ筈はなく、また実際にテレパシー現象の存在することは科学的に立証されています。しかしこの能力を開発することは至難事です。私が練習してみたところでは生涯の探求を必要とするようですが、しかし各感官の心をコントロールする努力だけでも、人間のゆがめられた精神状態を自身の力で正常に戻そうとすることになりはしないでしょうか。私はそこにアダムスキ氏の価値を見出すのです。「人間は神の子だから、そのように信じて振舞うべきだ」と断言する或る種の宗教の教義は私には不合理に思われます。「そのように信じて振舞うべきだ」ではなくて「自己の感受力でもってそのように感じ取れるようになれるものならなったほうがよいだろう」といいたいところです。言葉のあやで何かの概念やへ理屈をこねまわしたりするのではなく人体という受信機の感度をうんと高めて"自然"の放つ波動を感じ取ることを意味します。具体的には、無言の会話を交わしたり遠隔地を透視したりすることなのですが、病人の原因不明の患部を探知して適切な処置をとらせることもできましょうし、ネズミみたいに大地の波動を感受してせまり来る激変を予知し、事前に安全な場所へ退避することも可能となるでしょう。人間の世界はそこまでゆかなくては本当だといえないのではありますまいか。そしてこのテレパシーの能力は主義や教義をとなえて自己拡張をはかったりそれに同調したりすることによって得られるのではなく、自己を中立化せしめて万物のなかへ没入することによって開発できるというア氏の説明は全く正しいものだと思われます。これは"自然"のもつ調和性を観察すればわかることです。そこで或る意味でいえば進化は個人的なものであると申せましょう。「みんなそろって一緒に」というわけのものではないようです。

テレパシーについてはさまざまの解釈が行なわれているようです。たとえば、テレパシー観測会なるものが開かれたりして、多勢が集まって夜空に向かい「ベントラ」と念じたり呼びかけたりすれば円盤が現われると信じられていますが、アダムスキ氏の説くテレパシーの自己訓練はこんなことをすすめているのではありません。氏のそれは"自然"と一体化することによって個人の感受力を開発することを意味するのですから混同なさらないように――。詳細はアダムスキ氏著"テレパシー"に述べてありますが、私の拙訳になる邦訳版は絶版になっていますので、いずれ改訳新版を出そうかと思っています。ただし、いつのことになるかわかりません。

アダムスキ氏はこれまでに一貫して自己の体験の真実性を主張

し続けてきました。氏の体験記類はすべて事実に基づいた記述であるということになっています。しかし長年月にわたる体験のすべてを数冊の書物で説明し尽くすことは誰しも不可能でしょうしなかには公表できない事柄もあるでしょう。したがって文脈の前後に説明不十分な個所があったり矛盾するような文章があるかもしれません。そこで、言葉尻をとらえて攻撃する人があるのですが、しかし氏の体験はロケット類によって次々と確証されています。人間というものは攻撃するときは誇大に表現したがるものですが、逆に事実として確認されると沈黙するのが普通です。現段階としてはそれもやむを得ないことでしょう。最後的な確証としては人類が月なり他の遊星なりに到達して事実を見て帰ることにありますが、ＧＡＰ側の専門家によりますと、これが実現するのはさほど遠くはないということです。

◎　本号からタイプ印刷にします。しかし私はまだタイプライターを入手していません。本号は益田タイプ印刷所のご好意によってできたものです。ただし機械を入手できるまでは定期に出せるかどうかわかりません。先号でタイプライター購入計画を発表しましたところ、早速賛同と激励のお手紙を多数いただきまして厚くお礼を申し上げます。寄せられた浄財も八月末現在で計一万五千五百円に達しまして心から感謝致しておりますが、目標額にはまだかなりの開きがあります。如何程の額でも結構ですからご協力をたまわれば幸甚に存じます。一日も早く機械を入手して月刊で出したいと思っています。私が健在な限り世界ＧＡＰの一環である〝日本ＧＡＰ〟の仕事をやめることはありません。皆様のご健康をお祈り致します。

（久保田）

通巻第十二号

日本ＧＡＰニューズレター　1962 九月―十月号

編集発行人　久保田八郎

発行所　島根県益田市益田古川　日本ＧＡＰ

印刷所　益田タイプ

昭和三十七年十月十日発行

頒価　一〇〇円（送料共）